



図1 枝先について冬越しをするオオミノガ



図2 ミノの中のオオミノガのメス幼虫  
(写真提供：池田二三高氏)



図3 オオミノガのオス成虫 (写真提供：池田二三高氏)



図4 オオミノガヤドリバエ  
(写真提供：池田二三高氏)

オオミノガ、*Eumeta variegata* (Snellen, 1879)、は葉が落ちたカキやサクラの枝に落ちない枯葉のミノムシ(図1)として家の庭先などでふつうに見られた。蓑という昔使われた雨具に似ていることからミノムシと呼ばれているが、中身の正体が虫であることも意外と知られていないようだ(図2)。オオミノガというガ(図3)の幼虫で、チャやツバキなどにつくチャミノガやシバにつくシバミノガという害虫の他に、いまだに和名のつけられていない種類も含まれ、30種ものミノガ科というグループであると知って正直驚かされた。

静岡市葵区の瀬名という地区は、竜爪山に源を発する長尾川沿いであって、ゲンジボタルなどの昆虫や美声で有名なカジカガエルを含め、さまざまな生きものを観察できるので、四季のめぐりにつれての散策を楽しんでいる。5年ほど前、全国的にオオミノガの消長を調べているので、オオミノガを採集したいと協力を要請された。あらためて長尾川の周りを調べてみると、散歩コースにもいくつかのミノを見つけることができた。数としても二けたくらいは採れそうなので、お知らせしたら、サクラの咲き出す前の3月下旬の頃、茨城県つくば市にある国立環境研の研究者の石井弓美子さんが訪れた。

このオオミノガは1970年代から全国的に姿を見せなくなっており、その原因がオオミノガヤドリバエ、*Nealsomyia rufella* (図4)というヤドリバエの寄生率が高いことにあるということであった。山口県、福岡県、宮崎県では絶滅危惧類に、高知県では準絶滅危惧とされていた。この寄生バエは中国大陸からの外来性の昆虫であることがわかっているが、寄主のオオミノガは在来の種類なのか気になっていた。外来種ハンドブック(日本生態学会編、2002年)には外来種としてリストに挙がっていた。寄主も寄生者も外来種なのである。

長尾川の川沿いに植えられているサクラの枝にはぼつんぼつんが見つかるが、近所のある家の庭にあるウメの木には何十個というミノムシがそれこそ鈴なり状態であった。以降春先になんとか調査に来られ、その都度高いバエの寄生率は確認されているようである。県内の他の地域とちがってまったく見つけられないというようなことはなく、個体数はかなり維持されているので、石井さんはこの流域はオオミノガの「最後の楽園」ではないかといわれていた。長尾川流域がなぜオオミノガにオオミノガヤドリバエの寄生が少ないのか、全国的な調査に基づいたなぞ解きが待たれる。